

## 言語聴覚士養成校の音響学教育を考える\*

○竹内京子（順天堂大），青木直史（北大），荒井隆行（上智大），△鈴木恵子（北里大），  
世木秀明（千葉工大），安啓一（筑波技術大）

### 1 はじめに

ことばに関するリハビリの専門職である「言語聴覚療法」は、1900年代から存在している。そして、1997年に「言語聴覚士」という国家資格となった。現在は約34000名の有資格者がいる。しかしながら、言語聴覚士養成校の必修科目「音響学」は、臨床上の多くの専門科目の基礎であり、言語聴覚療法には、欠かせない科目にもかかわらず、養成校の学生にとって苦手な科目の筆頭にあげられることが多い。また、「音響学」を担当する専任教員は少なく、非常勤講師がほとんどである。さらに、他校同科目の教師との連携や、学生が音響学を学ぶための教材も少ない。

今回、我々は、以下のようなプロジェクトを立ち上げた。言語聴覚士養成校の「音響学」の現状（教師、養成校の言語聴覚士教員、学生による）のアンケート調査を実施して現状把握をする。各校の「音響学」教師と連携し、教材、授業内容について検討する。さらに、音響学教師と言語聴覚士教員との連携も視野に入れた、授業ガイドラインならびに、学生向け教材を実際に作成する。それらを全国の教師間、養成校学生間で共有できるコンテンツとして公開するというものである。この発表は、プロジェクトの現在における経過報告である。

### 2 プロジェクトの内容

#### 2.1 今なぜ音響学教育か？

言語聴覚士は、ことばの障害のリハビリを扱う専門職である。その臨床における適用分野はとても広い。それゆえ、国家試験の受験資格を得ることができる言語聴覚士養成校で学ぶべき科目は17科目（厚生労働省定め）ととても多い。その中でも、臨床の基礎であり

ながら、学生がとても苦手である科目が、音響学（聴覚心理学も含む）である。「音声学・音響学への関心度、苦手度実態調査 言語聴覚士養成校学生のアンケートから」（竹内・越智, 2015）[1]によると、音響学（聴覚心理学含む）の得意度は、A校の2年生（履修学年）では0%、4年生（最終学年）もわずかである。B校でも1年生（履修学年）から2年生（最終学年）で減少している。

さらに、「音響学が好き」と回答した学生に興味深い結果が出た。他の授業科目の好みとの関連を見るため、カイ2乗検定をした結果、「音響学好き」の学生は、同時に言語聴覚障害学の主要科目も好きであった。音響学の学習は単独ではなく、他教科との関連がとても大切である。

#### 2.2 音響学教育が抱える問題

音響学は、今まで言語聴覚士養成校以外の一般の大学において、もともと興味がある学生が、研究のため、知識欲のために勉強することが多かった。しかしながら、言語聴覚士養成が始まってからは、好き嫌いに関係なく全員が履修しなくていけない科目となった。音響学履修後のカリキュラムで学ぶ様々な臨床上の専門分野を理解するため、どうしても必要であるからである。

音響学の知識は言語聴覚療法の臨床の大前提である。この科目をよく理解したうえで各専門科目を学び、実際の臨床を行うことが理想である。それにも関わらず、今までは非常勤講師の担当教員に任せられていた。（現在、日本に設置された言語聴覚士養成校77校のうち、専任教員が音響学を担当しているものは、数人であろう）。

また、教師個人で授業を工夫する者はいて

\* Consideration from the aspect of acoustics education at Speech-Language-Hearing Therapist training schools., by TAKEUCHI, Kyoko(Juntendo University), AOKI, Naofumi (Hokkaido University), ARAI, Takayuki (Sophia University), SUZUKI, Keiko (Kitasato University), SEKI, Hideaki (Chiba Institut of Technology) and YASU, Keiichi (Tsukuba University of Technology).

も、授業内容を相談し、情報交換できる他校の教師とのつながりの場はない。言語聴覚士の職能団体の日本言語聴覚士協会でも、それぞれの臨床の専門分野の教育部会は存在しても、基礎分野の音響学・音声学の教育を考える部会はない。また、音響学・音声学の専門家の団体である日本音響学会、日本音声学会に所属する言語聴覚士はわずかである。

### 2.3 教師ネットワークの必要性

さらに、このように重要な科目でありながら、音響学をどのように教えるか（教授法）については、ほとんど議論されていない。それゆえ、初めて音響学担当になった教師は、独自で内容を考え、ひとりで試行錯誤することになる。授業がうまくいかなかった場合も、相談する相手はいない。中学校・高等学校の主要科目に、学んだ後の目標の上級学校の入学試験があるように、一定のカリキュラム後の成果を求められる授業には、サポートするための教科書や参考書が複数存在し、それに付随する教師マニュアルもある。教授法の研究会も盛んである。言語聴覚士の音響学にもこのような教師のネットワークが必要である。

## 3 これからの活動

これらの背景を踏まえ、本プロジェクトでは、全国の養成校の音響学担当講師が集まり、言語聴覚士教員と協力して、「言語聴覚士養成校の音響学教育には何が必要か、今何をすべきかを考える」活動を始める。また、全国の言語聴覚士養成校の学生に、その成果を還元できることを目指す。その結果、多くの学生が「音響学」を得意になり、好きになってもらうことを目標とする。具体的には、以下の3項目について考える。

言語聴覚士のための音響学・音声学は、健常者の音声だけでなく障害音声、一般的な音響学だけでなく聴覚検査・補聴器・人工内耳との関連を考え、解剖学等の医学的知識・音声障害・構音障害など全ての専門科目の知識とも結びつけることが必要である。音響学の知識が、どのように関連しているかを明確に示していくことを考える。

今泉・荒井（2007）[2]にもあるように、言語聴覚士養成校の学生は文系出身者が多い。音響学の授業では、丁寧にわかりやすく説明

することが必要である。そのための教材の開発や、実際の授業における教授法を考える。

言語聴覚士教員と、工学系の音響関係者や言語学者が多い音響学教師の間には、学会などにおいて、ほとんど接点がない。お互いに歩み寄ることによって、より質の高い言語聴覚士養成を目指すことができるだろう。両者の連携を考える。

## 4 現在の進捗状況

現在、言語聴覚士養成校向けのアンケート調査項目を検討中であり、近日中に実施の予定である。また、音響学・聴覚心理学担当教師のメーリングリストを作成した。さらに、プロジェクトの成果公開のサイト[2]の開設を行った。

## 5 おわりに

音響学は苦手意識からか、勉強も後回しにされることが多い。その原因のひとつは、音響学がどのように他の科目と結びついているかが分からず、もしかしたら将来、特定の分野以外では、いらないと思えるからではないだろうか。学生が考える以上に臨床の様々な場面で音響学の知識が必要であること示していくことが必要である。そのためには、音響学教師は言語聴覚療法について学び、言語聴覚士教員も音響学について学ぶという関係が必須である。今回のプロジェクトは、そのきっかけを作りたい。

## 謝辞

本発表は、言語聴覚士養成課程における「音響学教育」の現状調査と授業ガイドライン、教材作成（科研費番号 20K03074）と博物館・科学館や教育機関等との連携を視野に入れた声道模型を中心とする教材の開発（科研費番号 18K02988）の成果である。

## 参考文献

- [1] 竹内京子, 越智景子, 音声学・音響学への関心度, 苦手度実態調査 言語聴覚士養成校学生のアンケートから, 日本音響学会研究発表会講演論文集 CD-ROM, 2015
- [2] 今泉敏, 荒井隆行, 言語聴覚士のための音響教育: 基礎から実用へ, 日本音響学会誌, 2007, 64 巻 1 号 p. 47-51
- [3] <https://stonkyo.xyz/>